

6.4 中国が語りはじめた遊牧文明

1988年、中国の民族学界の開祖的な人物である費孝通は香港中文大学主催の「ターナー・レクチャー」において、「中華民族の多元一体格局」と題する講演を行った。費は、「自覚的な民族実体」としての「中華民族」は中国が西方列強と対決するようになった19世紀以降に形成されたものであるが、民族そのものの実体は数千年にわたる歴史的なプロセスの中でできあがったものだ、という理論を提示している（費孝通、1989、1）。

「中華民族」の発祥は多元的であるが、その核心は漢族だと費孝通は強調する（費孝通、1989、2-5）。費孝通は「中国国民（ネーション）」という現代中国ではまったくポピュラーでない近代的な概念を民族、「中華民族」でもって表現することにより、歴史的に中原以外の世界で実在してきた少数民族の歴史とその独自性を否定しようとした。その否定作業は、少数民族が中国から離脱するのを防ぐためであった。

費孝通の理論に対し、少数民族出身の研究者たちの多くは冷静かつ批判的な態度をとっているが、政府御用の漢人研究者たちからは熱烈な支持が得られているようだ。もともと民族学の概念、あるいは民族政策の概念にすぎなかった「中華民族多元一体格局」はたちまちさまざまな分野に演繹されていった。そのうちの1つが中華文明論研究である。いわゆる「中華文明」も「多元的起源」をもち、その中には「遊牧文明」も含まれる、との言説である。以下では、中国の研究者たちがどのように遊牧文明を語っているか、またその目的は何であるかを逐一検討してみたい。

6.4.1 ブラック・ユーモアかそれとも矛盾語法か

漢人研究者の筆下から「遊牧文明」という文字が現れたとき、思わずこれはブラック・ユーモア

ではないかと驚愕した者は少なくなかろう。中華思想の文脈からすれば、「遊牧」と「文明」は二項対立する概念で、相対峙する存在を結びつけた行為は、一種の矛盾語法ではないか、と疑いたくなる。中華の文人たちは古くから北方の遊牧民たちを夷狄・異族と呼んできた。『左伝』のような古い典籍には「吾が族類に非らず者は、その心も必ず異なる」と明確な認識をもっていた。北方の異族が繰り返す中原世界への武力征服の前で無力が証明されたとき、対策として考えだされたのが、「文」や「文化」である。漢語の中の「文化」という言葉も、もともとは「野蛮な夷狄」を開化させるという意味をもっていた。こうした脈絡で振り返ってみると、「遊牧」と「文明」は少なくとも中華思想の世界では結合できる余地は、本来はなかったはずである（図6.15）。

では、昨今注目されつつある「遊牧文明」という言説が誕生した背景は何だろうか。私は以下3つの要因があるとみている。

a. 「中華文明」の起源と夷狄の地

まず、「中華文明」の起源の問題。漢族の知識人たちはよく「中華文明5000年の歴史」と表現してきたが、古代エジプト文明やインド文明のように歴史学の編年によって証明されたわけではなかった。従来、考古学的に立証できるのも商代以降の4000年の文明史にすぎない（蘇秉琦、2005、1）。

1979年5月になって、中国の考古学界に大きな転機が訪れた。内モンゴル自治区東部のウラーンハダ(Ulayan Qada, 赤峰)地区から東の遼寧省西部の喀喇沁左翼蒙古族自治县にかけて、西遼河遺跡が発見された。ウラーンハダの遺跡は第2次世界大戦終了前に日本の考古学者濱田耕作と水野清一も注目したことがある（濱田ほか、1938）。中国の考古学者たちは十数年間調査を続け、西遼河遺跡が複数の文化層からなっていることが突き止め

第1026期 2005年9月21日 星期三
 編者 夏原 編輯 蘇聚 電話(010)65369500

異國風情 21 2005年9月21日 星期三

四季都穿獵皮 數量不足兩百

蒙古馴鹿人過着原始生活

本報駐蒙古特派記者 霍文

在蒙古國北部察哈爾省約300公里處，有一個叫蓋干諾爾的地方，這裏生活着一個獨特的“馴鹿人”群體。馴鹿人現在仍然保持着原始的生活方式，他們主要依靠放牧馴鹿、打獵以及製作手工藝品為生，並年復一年地遷徙於蒙古國呼倫貝爾省。近日，記者從烏蘭托勒素近千公里來到察哈爾省，與馴鹿人一起生活了幾天。

馴鹿人每隔三週就遷移一次

蒙古國的馴鹿人最早是從俄羅斯遷徙而來的，他們生活在海拔2300-3500米終年積雪的原始針葉林中。這裏的氣候非常寒冷，冬季氣溫均為零下29-55攝氏度，夏季均為12-23攝氏度。馴鹿人因此一年四季都穿皮製成的衣服。近年來，由於氣候變暖，馴鹿人也開始穿著蒙古傳統服裝。

馴鹿人居住的房子呈圓錐形，用22-38根針葉木搭建而成，外面則用馴鹿皮覆蓋，以利於保暖。馴鹿人的住房如北向南，是因為他們要隨着季節的變化，每隔三週就遷移一次，以便接近馴鹿生活的區域。

馴鹿人的飲食比較單調，主要食物有馴鹿肉和其他肉類，以及用面粉製成的餅、粥。酒是馴鹿人的生活必需品。當他們有錢的時候，即使家庭沒有了飲用的酒，他們也會考慮用錢買酒。馴鹿人中的女性也非常喜歡喝酒，很多女孩從14歲就開始喝酒。

馴鹿人的手工木器技術精湛，無論馴鹿人還是動物，各個栩栩如生。每一件作品都要刻作者的姓名，絕對不會出現相同的兩件作品。因為馴鹿人信仰薩滿，而蒙古的薩滿儀式要戴面具，面具用紅、黃、藍、黑、白等。意在激發人們對神的敬畏與崇拜，所以舉行薩滿儀式的人就像馴鹿人雕刻的主題對象之一。這些人物像形多為羊、鹿、鳥、獸、人。

70%的馴鹿人生活在貧困線以下

這些保持着傳統生活方式的馴鹿人面臨着許多困難。察哈爾省察哈爾特右旗參加馴鹿人那達慕的薩爾吉爾老人告訴記者，目前生活在這裏的馴鹿人不足200人。繁衍的馴鹿僅有600隻左右。除疾病外，自然死亡、野蠻獵殺等也是馴鹿減少的重要原因。

近幾年，由於馴鹿數量不斷減少，馴鹿的價格大幅度下跌，70%的馴鹿人生活在貧困線以下，他們面臨着缺少食品和藥品等諸多困難。據蓋干諾爾縣長達瓦尼瑪介紹，十幾年前一公斤鹿角可以賣到125美元，近幾年卻只能賣到5000圓格魯瓦（1美元約合1200圓格魯瓦），下降了幾十倍。據蒙古官方2003年的統計數字，蒙古33%的馴鹿人生活極度貧困，38%的馴鹿人生活貧困。

值得欣慰的是，近來蒙古政府將實施向馴鹿人提供生活、醫療等各方面的幫助，同時也要讓馴鹿人的子女享受教育，以逐步提高馴鹿人這個特殊群體的素質，改善他們的貧困狀況，讓馴鹿人享受現代人的生活。▲



馴鹿人騎在馬上放牧馴鹿。 霍文攝



健壯的馴鹿

圖6.15 モンゴル国のトナカイ遊牧民を「原始的」と見なす中国の報道
 (『環球時報』2005年9月21日)

られた。そしてその中には大規模な祭祀，都市遺構が確認され，年代的には5000年以前のものであることが判明した(蘇秉琦，2005，2)。

ここに至って，現代中国の領土からはっきりと5000年以前と主張できる遺跡が発見されたのは，中原ではなく，古くから夷狄の地とされてきた地から発見されたのである。マルクス主義的唯物主義を標榜する中国の研究者たちは従来の中原中心史観をあらためなければならなくなった。考古学界の重鎮蘇秉琦は素直に述べている。「中華民族の形成という極めて重大な問題を考える上で，考古学界には間違った認識があった。あまりにも中原文化を過大評価し，北方文化を低くみてきた」と認識を修正している(蘇秉琦，2005，2)。「中華文明はほかの文明より1000年も短い」というコンプレックスを解消するのに，北方文化，遊牧民たちが生活してきた地の文化が役に立つとは，中華の知識人たちは夢にも思わなかっただろう。

b. 民族問題に対処するための「中国史研究」

次に，政治的な背景である。とるに足らぬ北方文化，遊牧文化，いや文化をもっているかどうか

すらわからない遊牧民たちは，中華人民共和国の北，万里の長城以北の広大な領域に暮らしている。長い国境の向こう側には彼らの同胞たちと同じアルタイ語系の言葉を話す歴史上の仲間が住んでいる。ユーラシアの大半が同じ社会主義体制下に入った時代でも，同胞との交流は自由ではなかった。このような時代が幕を降ろそうとしていた頃，新疆ウイグル族自治区でいわゆる「3冊の本の事件」が起こった。この事件はそれ以来の北方文化，遊牧文化に少なからぬ影響を及ぼした。

「3冊の本」とは，ウイグル人の作家トウルグン・アルマス(吐爾貢・阿勒瑪斯)が1986年10月から1989年10月にかけて新疆青少年出版社から出した『ウイグル人』、『匈奴簡史』、『ウイグル古代文学』を指す。ウイグル語で出版されたため，すぐに漢人側にその内容が伝わらなかったことも考えられるが，「3冊の本」が問題とされ正式に批判されはじめたのは1990年2月からのことである。私は1991年から3年間かけて新疆ウイグル族自治区で遊牧民社会について調査を実施したが，人々は「3冊の本」に関する話題を極力避けようとしていた。当然，「3冊の本」も手に入らなかつ

たが、それを批判した論文集（馮大真、1992）からその内容を垣間みることができよう。

批判論文集によると、「3冊の本」の著者は「ウイグル族は中華民族の一員ではない」という立場に立脚し、「中国は古来から統一された、多民族国家であるという事実を否定し、ウイグル族など古代北方の遊牧諸民族が建立した地方政権を中国とはまったく別の〈独立国家〉のように描いた」点が間違っているという（馮大真、1992、p.2）。また著者の民族間関係についての記述は、「わが国の歴史上の民族間関係の主流は平和共存であったにもかかわらず、民族間衝突や民族間紛争を極端に強調」しているという（馮大真、1992、pp.3-4）。

中国政府が事前に「3冊の本」を漢語に翻訳し、中国国内の多くの研究者を動員して批判キャンペーンを行った背景には、1989年夏に民主化を求める学生たちを武力で鎮圧した「天安門事件」直後の国内の不安定な情勢と、ソ連の解体に代表される社会主義陣営の崩壊があげられよう。裏を返せば、「3冊の本」を批判した論文集から読みとれるのは、「歴史上の北方の遊牧民族諸集団はすべて中華の少数民族で、彼らが建立した政権はあくまでも地方政権である」ということであろう。論文集に文を寄せた研究者の1人、自称匈奴史家の林幹は次のように書いている。「北方の諸民族史を研究する際、1921年のモンゴル独立を境界としなければならない、1921年の独立以前の外モンゴルは中国の領土であり、この地で活動していた匈奴や突厥も中国の国内民族であり、彼らの歴史も中国史の一部である。彼らと漢族との関係は、中国国内の民族間関係である。……この問題は現在のわが国の対外政策にもかかわり、中国古代史における北方民族研究の常識である」と主張している（林幹、1992、p.120）。

要するに、匈奴や突厥、それにモンゴルのように現代中国の枠組みを超越して活動していた諸集団の歴史がどのように描かれるかについて、中国は過剰なほどに反応した。漢人以外の研究者が北方の遊牧民について研究するのに危機感を抱くようになった。そこで「わが国の北方文化」「わが国の遊牧文化」研究へと移行していった。あらか

じめ設定された中国史という桎梏の中の遊牧民文化、遊牧民史研究ではあるが、それが中華文明の発祥年代をさらに古くまで遡らせるにも有効であったため、まさに一石二鳥のごとき好事であろう。

c. 中原を守るための「野蛮人」の智慧

最後に生態環境の悪化である。漢人は歴史的に天下の中心たる中原の対極としてモンゴル高原を描いてきた。彼らは長城以北の域を指して、荒漠や草地、無人の地、人畜同栖の地などと表現し、そもそも人間が住む土地ではないと理解してきた。中華人民共和国の成立以降、モンゴル高原の一部は中原の鉱物資源、肉や乳類の供給地となり、略奪的な開発を受けつづけてきた。近世の日本人がつくった「草原」という言葉もいつしか導入され、荒地も中国人（漢族）に少なからぬロマンを与える存在と化した。

野蛮がロマンチックに置き換えられるのは植民地表象の1つの典型ではあるものの、それもつかの間だった。2002年3月18日から21日まで続いた沙塵暴（サーチンポウ）は、1990年代から度々発生した沙嵐の中で最も大きく、首都北京をはじめ、北部中国全域に大きな被害をもたらした（蓋山林ほか、2002、p.11）。まるでそこに住んでいた過去の主人たちにかわって中原に復讐するようになった荒地あるいは草地をみて、中国も環境保護、生態改善に取り組むようになった。かつて1960年代から1970年代にかけて都会から内モンゴルの草原に下放されていた知識青年（下放青年）の1人が『神なるオオカミ』（『狼図騰』）という小説を書き、モンゴル人の伝統的な生態保護観を正当評価した（姜戒、2004）。ここに至って、漢人知識人たちは少なくとも北アジアの貧弱な自然環境を維持するには、「野蛮な遊牧民」から学ぶべきものがあることに目覚めだした。近年出版された研究書はいずれも遊牧民の生態保全観を高く評価している。もっとも、それは文明的な中原を沙塵暴から守るためであったかもしれない（図6.16）。

内蒙古新聞・視点

北方新報 2005年7月15日 第10055期 第10版 記者 張建強 攝影 張建強

錫林郭勒草原: 能不能永远停留在游牧时代?

6月底, 錫林郭勒盟烏盟加強草原、天然草場, 野羊, 以及草原鹿等, 景色令人陶醉, 這是內蒙古中部最好的草原之一。由於特殊原因, 今天內蒙古的草原大部分退化, 中部的工業發展又規定了大片草原。只有在那裏的退化草原和115萬畝的東烏盟, 烏盟, 這些沙地, 仍保留著原始的草場。近年來, 當地牧民除了開始購買牧草, 相傳半年的生活習慣並沒有太大改變, 但是, 一場巨大的改變也悄然開始了。

6月24日下午, 記者在內蒙古自治區烏盟盟委宣傳部副部長張建強, 來自天津、江蘇以及黑龍江的牧民正在修築水池, 搬運材料, 他們將要在荒涼的草原上修築一些水池, 這座水池將改變的不僅是牧民的飲水, 還有生活在河套下游的眾多牧民的生活方式, 也將影響到這片草原的未來, 甚至會影响到此地的發展。

張建強表示, 此次修築水池, 是為了改善牧民的生活, 也是為了保護草原。牧民們將在水池邊修築一些棚架, 方便牧民們放牧。此外, 水池還能起到防洪的作用。

在錫林郭勒盟, 牧民們的生活正在發生著巨大的變化。隨著工業的發展, 草原的面積正在不斷減少。為了保護草原, 政府採取了一系列措施, 包括修築水池、改善牧民的生活等。

然而, 牧民們也面臨著巨大的挑戰。由於草場退化, 牧民的收入正在不斷減少。為了維持生活, 他們不得不尋求其他的發展途徑。

牧戶共創新發展 企業投資修築水池高標準 以牧為天下化之上下化, 其實, 除了水庫外, 水利設施, 修築水池之外, 電力項目的環保報告也通過了, 按照原計劃, 通過環保后才能進行建設。所以, 電力項目的建設在延期。

不過, 包括錫林郭勒盟政府、盟委會領導, 盟黨工部對這個項目的重視程度, 是以前所罕見的。在工程人員對記者表示, 我們承包了這個項目5000萬元, 其中2000萬元(3.3%)工程, 費用是免稅的, 但這是標準的舉例。

然而, 當地政府對牧民的配地工作, 在用地建設方面進入了下三十個億的“高天價, 資本正在再加工, 政府和業主都很有意見, 牧主學現在幾乎都處於在“停水、電”和“無水、無電”的狀態下, 當地牧民的痛苦。

不僅如此, 目前牧場的經營權, 在牧民手中, 牧主不知道水庫的, 直到政府派人通知和地產權事宜。烏盟一家是5月15日開始和地產權事宜, 他已經用了700多畝地, 住在那附近的火吉木, 他用了200多畝, 他租用的多是錫林郭勒草原, 一畝地, 草原上佔, 大的場, 他不知道, 烏盟對地產權有阻礙。哈日根台旗



圖 6.16 「內モンゴルのシリンゴル草原はずっと遊牧のまま維持できるか」との新聞記事 開発と伝統のあいだを揺れている人々の心情が伝わる(『北方新報』2005年7月16日)。

6.4.2 遊牧文明の語り方

以上のような背景から遊牧文明を語りはじめた中国であるが、その具体的な語り方を次のような3つのタイプに分けてみたい。

a. 遊牧文化・遊牧文明の語り方

遊牧文化・遊牧文明を最も大きなスケールで描き、中華文明と比較しながら論を展開したのが、孟馳北の『草原文化と人類の歴史』(1999)である。

孟馳北は南中国の江蘇省の出身であるが、新疆ウイグル自治区に40数年間暮らし、かの地で遊牧民に接したきっかけから、およそ14年間かけて同書を執筆したという(孟馳北, 1999, pp.989-991)。

上下2冊、計14章からなる同書の中で、孟馳北はユーラシアの広大な世界において、15世紀以前のすべての出来事は何らかの形で遊牧民の動向と連動している、との立場をとっている。中華世界と関連していえば、神話上の炎帝や黄帝も古代の漢人が西域と呼んだ地域から現れており、遊牧民的な色彩を濃厚に帯びている。今日の中華民

族という概念も、実際は「遊牧民+農業的な土著民」、つまり両者が混血・融合して形成されたものであるという(孟馳北, 1999, pp.3-4)。

農耕社会が専制的であるのに対し、遊牧社会ははるかに民主的であった、と著者は豊富な文献資料を駆使して立論する。そしてそのため、遊牧民の伝統を受け継いだヨーロッパは活性化に富み、近現代に入ってから早くも民主主義体制が確立された。一方、中国など東アジアの農耕社会は怠惰な精神が蔓延し、思想上の抑圧が長く続いた(孟馳北, 1999, p.4)。著者は最後に今日において表象されている農耕と遊牧社会それぞれの政党制度のあり方で巻を終えているが(孟馳北, 1999, pp.989-990)、下手をすれば体制に批判的とも受け止められるという指摘も多数ある。このように遊牧文明を語るべきの中国の研究者たちの脳裏には、実に複雑な狙いが隠されているようだ。

孟馳北の遊牧民社会全体の文化・文明を論じた著作と比べて、田広林の『中国東北西遼河地域の文明の起源』(2004)は、特定の地域に栄えた古代文明をとりあげた作品である。内モンゴル自治区のウラーンハダ(赤峰)市紅山遺跡などを含む西

遼河文明は、6.4.1項で触れた蘇乘琦らに注目された巨大な古代遺跡である。同遺跡の出土品について編年的な研究を行った田広林は次のような結論を導きだしている。

中国の歴史において、古代北方の狩猟遊牧文化と中原の農耕文化は同時に並存し、発展してきたが、もともとの両者の境界線は西遼河であった。西遼河文明は漁労・農耕文明であったが、商代と周代以降にこの地域が遊牧文明圏内に入ったため、「中国の農耕文明」と「中国の遊牧文明」の境界線も西遼河あたりから燕山山脈以南へと移った。とはいえ、西遼河文明は「多元的な中華文明の一部」であることに変わりはない(田広林, 2004, pp.274-275)。

考古学的な裏づけが長城以北の遊牧地帯から現れた現在、「中華文明多中心説」(嚴文明, 2005, pp.12-13), 「中華文明多元一体説」(孫敬明, 2005, p.15)をとる研究者が多くなった。2004年7月からスタートした内モンゴル自治区の政府主導の「草原文化研究プロジェクト」に寄せた内蒙古社会科学院院長吳団英は、「中華文化は黄河文化と長江文化, それに草原文化の3つから構成されている」と明言している*1(吳団英, 2005)。

b. 北方民族史の語り方

以上で紹介した文明論的な研究のほか、個々の北方民族の歴史について論じた成果にも従前とは異なる論調がみられるようになった。その一例として、まず任愛君の『契丹史実掲要』(2001)をみてみよう。

任愛君はまず著書の序論の中で、契丹は中華民族多元一体格局の基礎をつくった王朝で、中華民

族に大きく寄与した歴史をもつとの見方を鮮明にしている。そのため、契丹史研究をする際には中国固有の華夷秩序や中原正統論を超越して、「契丹人の立場で契丹史を研究しなければならない」と主張している(任愛君, 2001, pp.3-4, p.264)。

「中華民族大一統の基礎をつくったのは契丹だ」と力説する任愛君の史観は、中国以外の歴史学界と比較すると、決して新鮮な学説ではない。周知のとおり、早くも1949年にウィットフォーゲルらは遼王朝を例に「征服王朝」論を出している(Wittfogel and Fêng, 1949, pp.1-35)。もちろん、「征服王朝」論は日本でもさまざまな反響を引き起こした。しかしこのような中国以外における歴史学的議論について、任愛君はまったく触れていない。漢族の虚栄心を満たすために「征服」という文字を敬遠したのかもしれない。代わりに任愛君は北方の遊牧民による中原征服を「契丹現象」という(任愛君, 2001, pp.304-322)。非常に賢く表現しているのも特徴的であろう。

東北の遼寧省出身の孟広耀は『蒙古民族通史』の第1巻(2002)を執筆した研究者でもある。彼は『北部辺疆民族史研究』(上下)*2の中で、日本の一部の東洋史研究家たちが中国侵略に加担したことに触れ、辺疆史研究における愛国主義的思想の必要性を強調している(孟広耀, 2002, pp.1-15)。

続いて孟広耀は筆鋒を中国国内の史壇に向ける。北方民族を論じる際によくみられる「北方民族の立ち遅れ論」「北方民族による侵略略奪論」「北方民族を〈外〉や〈侵〉で以て差別的に表現する方法」などを批判する。つまり、北方の遊牧民はずっと原始社会にとどまっていたという社会発展段階論や「大漢族主義」的な立場で歴史上の出来事を論じるのではなく、「漢と契丹は同じ家族」との視点で議論しなければならない」という(孟広耀, 2002, pp.16-21)。

孟広耀はさらに漢人たちが古くから愛してきた講談演義『楊家将』の上映は好ましくないと主張している。北宋と契丹の対立史を演義小説として描く『楊家将』は楊業らを「愛国主義的な民族英雄」として評価していることをとりあげて、もし北宋のみを愛すべき国とし、楊業らを漢族の英雄

*1 2005年7月28日から29日にかけて、内モンゴル自治区のある地方都市で開かれた「チャハル文化研究会」の席上、内モンゴル自治区党委員会の宣伝部長莫建成も、中華文明は黄河文明と長江文化、それに草原文化からなる、と発言していた(<http://new.nmgnews.com.cn/information/article/20050730/12045-1.html>)。このような言説が政府系幹部にも認められていることの現れである。

*2 同書は中国社会科学院の『辺疆史地叢書』の1つで、「国家領土の主権を守り、隣国との関係をうまく処理し、国内の諸民族の団結を強固にし、愛国主義教育に使用する」ために編纂されたものであることが序文に書かれている。

と判断したら、契丹の存在をどう位置づけるのか、との問題を投げかけている（孟広耀, 2002, pp.344-345）。

契丹の存在はあまりにも大きく、一時は中国そのものも契丹（キャセイ）と呼ばれていた歴史を任愛君や孟広耀らは知っている。『楊家将』を愛する漢人大衆は理想的な中原＝中華世界に深い愛着心をもっているのに対し、任愛君や孟広耀らは今の中華人民共和国の広大な領土を維持するのに責任を感じているらしい。両者の間にさほど大きな質的な差異はなからう*1。

c. 遊牧民の環境を破壊したのは誰か

満洲人の蓋山林はもともと陰山の岩画を研究する考古学者で、実質的には何ら存在価値のない中国の数少ない野党の黨員でもある。共産党の「民主的な寛容性」を示すため、野党黨員に限られた「自由発言権」が与えられていることを活かし、彼は『文明が消失した現代的な啓悟』（2002）の中で興味深い観点を示している。

中国は元来生態環境が弱く、水資源に乏しい国だ、と蓋山林は指摘する（蓋山林ほか, 2002, pp.10-11）。一般の中国人はみな、中国は「地大物博」、つまり国土面積が広く、資源も豊かであると思込んでいることに警鐘を鳴らしている。そして、古代の農耕文明はいずれも環境問題に善処しなかったために滅んだと説明している（蓋山林ほか, 2002, p.19）。

中国史の場合、秦の始皇帝が北方へ直道をつくり、続いて漢が河南地（今日のオルドス）へ大量に移民し、明代には長城を建設し、そして清が「移民実辺」を実施したため、今日の内モンゴルの南部が砂漠化した、と端的に指摘している（蓋山林ほか, 2002, pp.156-157）。従来の漢人研究者たちは秦の直道建設を祖国統一のための必然的な措置とし、長城を「中華民族のシンボル」とするなどの見方と比べれば、蓋山林らの見解には目からうろこが落ちるほどの誠実性を感じられよう。

蓋山林らはさらに自らの長い実地調査で得られた遊牧民の生態保護意識を詳しく紹介している。「わが国の古代北方の遊牧文明は、生態環境と自然の保護を存続と発展の前提としている。遊牧民

たちは長い間、自然環境の劣悪なところ、たとえばモンゴル高原やチベット高原のような地域に暮らし、豊富な環境保護の知識をもっている」と立論している（蓋山林ほか, 2002, pp.536-537）。同様の見解は日本ではすでに松原正毅によって出されているが（松原, 1998, p.15）、中国のような農耕社会を至上の文明とする国の研究者からいわれると、隔世の感がしてならない。

6.4.3 モンゴル人研究者たちの語り方

内モンゴル自治区に住むモンゴル人たちは、今や政治的には中華人民共和国のマイノリティ、少数民族の身分である。彼らは従来漢人たちから「文化すらもっていない」とか、「モンゴル人は単なる文化の対象」すなわち「研究の対象」とみられてきた（吉爾格勒ほか, 2002, pp.4-5）。漢人たちが派手に「遊牧文明」だの「草原文明」だのと語りはじめたのを受けて、モンゴル人たちも少しずつ慎重に自己主張をしはじめた。というのは漢人研究者が大胆な学説を出したときには、「ユニーク」だと評されるのに対し、少数民族の場合は上で紹介した「3冊の本」のように政治的にすぐに封殺される危険性があるのを当事者たちはよく知っているからである。

モンゴル人たちはあくまでも「中華民族の一員」を自認せざるをえない前提で、中華世界から逸脱する気は毛頭ないというそぶりをみせながら、学説を練りあげるしかない。それでも上に述べた漢人研究者たちの観点を相対化するのに、モンゴル人研究者たちの主張に耳を傾ける必要がある。

*1 以上のほか、一般向けに書かれた侯広峰の『昭君文化』は匈奴文化は中華文明の一部で、儒教の「仁愛」の精神で匈奴を理解しようとしている（侯広峰, 2001, p.119, pp.142-147）。イデオロギーの魅力がなくなった現在、「敵を愛そう」という軽薄な博愛精神のコピーにすぎない。また「文明の探索」というシリーズの一冊として出された『元朝——鉄騎が踏み出した帝国』（2005）は、モンゴル帝国を中国の一王朝とみなし、モンゴル人の遠征も漢人の虚栄心を満足させるために利用されている。

a. 苦心惨憺のモンゴル人研究者たち

モンゴル人研究者たちがモンゴル語で書いた遊牧文明論の中で、比較的早く現れた作品の1つがアクタイとサルナの『遊牧経済とモンゴル文化』(Negüdel Aju Aquı kiged Mongyol Soyul, 1998)である。著者たちは「モンゴル文明」(Mongyol bolbasun)はすなわち「遊牧文明」(negüdel-ün bolbasun)であるとした上で、牧畜経済と遊牧民の文化が「モンゴル文明」の2つの基軸である、と定義している(Aytai and Saran-a, 1998, pp.1-72)。「モンゴル文明」は決して過去のものではなく、継承性、広汎性、統一性、それに堅実性という特徴があるという(Aytai and Saran-a, 1998, pp.25-28)。遊牧文明の今日までの具体的な変遷をたどる際、北アジアや中国の気候変動との関連性に注目するという手法をとっている*1(Aytai and Saran-a, 1998, pp.56-57)。

遊牧文明の具体的な構成要素として、アクタイらは、①放牧(移動)方法、②衣食住、③儀礼、④文芸活動などをあげて詳述し分析している(Aytai and Saran-a, 1998, pp.73-91)。この点は日本の研究者たちが主として去勢や搾乳、それに群れのコントロールなど遊牧の技術的な側面とその儀礼化に注目してきたこと(梅棹, 1990, 小長谷, 1991)と異なる一面を示している。それは、日本の研究者たちからすれば、遊牧は最初から異質な対象であり、当然その維持装置に注目しがちであるのに対し、中国のモンゴル人たちにはどこことなく消えつつある文化を極力詳しく記述しておこうという目的があるようにみえる。

2004年に出版されたサインチョクトの『景観に生きるしきたり——生態の人類学的研究』(*El Bayiča-du Sayuqu-yin Yosun — Ami Aquı-yin Kü-mün Jüi-yin Sinjilel* (2004))は、古くからの年代記や数多くの手写本、それにモンゴルの慣習法などの資料を、著者自らの実地調査のデータと総合させた著作である。

サインチョクトは遊牧民の自然利用の知恵を分析するのに、なぜ、どのように移動するのか、という基本的な点から着手している。遊牧民の移動はただ単に貧弱な自然を利用してきたという合理的な考えからではなく、北アジア固有の拝天思想、

自然崇拜の信仰と結合した哲学的な行為である。このような営為者である遊牧民は動植物を観察し、豊富な知識をもち、自然との共生を実行してきた存在である。遊牧民の自然利用の知恵は単純な民族知識ではなく、今日の生態学的な視点からみても合理的で、科学的ですらある、と著者は説明している(Sayinčoytu, 2004, pp.1-16)。

サインチョクトの議論は、民族知識は科学知識の対極ではなくても、せいぜい破壊された過去の景観に郷愁を馳せるときしか思い出せないものだ、という軽薄な民族知識活用論への一喝でもある。

モンゴル人研究者たちはユネスコが1998年に設置した「国際遊牧文明研究所」(International Institute for the Study of Nomadic Civilizations)の活動と存在意義を大いに意識している(Jayarほか, 2001, pp.1-3)。そして「西部大開発」を国策として推進する中国において、止められない工業化と農業化の波の中で、いかに「生態保護」の名目で、すでに傷だらけになっている故郷を守るか、という悲痛な目的も隠されているにちがいない。

b. 蒙漢合作の政府プロジェクト

近年、中国政府の国家教育委員会の人文社会科学の大型プロジェクトにも遊牧文明をテーマとした課題が採択され、成果を出している。劉仲齡とエルデンブヘが編集した『遊牧文明と生態文明』(*Negüdel-ün Soyul Irgensil kiged Ami Aquı-yin Soyul Irgensil* (2001))はその一例である。このプロジェクトには漢人とモンゴル人、自然科学者と人文社会科学系両方の研究者たちが参加している。プロジェクトは最初からイギリスのキャロライン・ハンフリー(Caroline Humphrey)教授主催の「マッカーサー・ECCIA (Environmental and Cultural Conservation in Inner Asia)・プロジェクト」を意識し、外国の研究に遅れをとらぬために組織された性質をもつ*2。なお、同書の第1冊

*1 このような試みは最近日本でも白石(2002, pp.6-8)らに採用されている。

*2 ECCIAプロジェクトの成果として、2冊からなるHumphrey and Sneath(1996)がある。

はウ
ル語
外国
いる
文の
ルカ
研究
う。
書
モン
科学
同書
(教仁
(1
(2
(3
(4
と
研究
いる
こ
矛盾
は、
局
政策
多
牧
論
張し
て
野
西
戦

はウランチムク (Urančimeg) らによってモンゴル語に翻訳されている (2001)。遊牧文明の研究は外国の研究者たちの著作を翻訳することも含めていることがわかる。客観的にみて、同書所収の論文の多くは従来の同種の研究より、学術的なレベルが高くなっている。ここに至って、中国国内の研究が到達した水準を表しているとは評価できよう。

敖仁其主編の『制度の変遷と遊牧文明』(2004) はモンゴル人と漢人の両方からなる内モンゴル社会科学院の優秀な科研プロジェクトの成果である。同書は以下の4点の主張を明確に打ちだしている (敖仁其, 2004, p.3)。

- ① 従来の遊牧文明に対する間違っただけの認識を是正しなければならない。
- ② 中国文明は多元的な起源をもち、そのうちの1つが遊牧文明である。
- ③ 遊牧文明の核心は「生態文明」であり、内モンゴルは遊牧文明の発祥の地の1つである。
- ④ 遊牧文明は今後も継続可能である。

以上のような結論からみると、中国の遊牧文明研究者たちが1つの共通認識を呈示しようとしている流れを感じる。

6.4.4 虚言としての「中華民族」論

ブラック・ユーモアのような性質をもちながら、矛盾語法的な側面を含んだ中国の遊牧文明研究は、単なる生態論 (環境論) あるいは認識論的な局面を超越しつつあるのが現在の状況であろう。政策論的色彩が極めて濃厚な費孝通の「中華民族多元一体格局」論に依拠した理論が多いため、遊牧文明論研究の今後の方向を考えると、費孝通理論内の捏造部分、つまり費孝通が「事実」だと主張している中に狂言が隠されている部分を指摘しておかねばならない。

費孝通は「中華民族」の前身は近現代において西ヨーロッパ列強に対して「存亡をかけてともに戦った歴史をもつ」と主張している (費孝通, 1989, p.1.

1997, p.475)。この論点の目的は、新疆やチベット、それに内モンゴルの各民族が、民族自決のために戦った歴史を完全に否定しようとするところにある。換言すれば、各民族独自の歴史をあくまでも中国史の一部として扱おうとする大漢民族中心史観である。

漢人研究者たちの中で、どれぐらいの人が明確な政治的意図をもって「中華民族多元一体格局」を發展させようとしているかは不明である。少なくとも「中華民族」という「国民」概念の呈示に、一部の知識人たちが嬉々として賛同したのは事実である。漢人であるがゆえに、生まれつきに保証されている安全性と無難性を活かしながら、彼らは相次いでユニークな説を導きだした。彼らの大胆な立論は評価すべきであろうが、あまり酷なことを彼らに求めてはいけない。「中華」という仮想世界から飛躍するのに、「遊牧」は桎梏ではなく、手段の1つとされているからである。

このような中国における議論をみて、遊牧研究において先駆的な蓄積をもつ日本の研究者たちがどういう方向へ向かうべきか、真剣に考えなければならなくなっている。 [楊海英]

附記：本稿は2005年3月18日に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「ユーラシアにおける遊牧民の歴史的役割」の席上における発言をもとに書いたものである。

▶ 文献

- Aytai and Saran-a (1998) : *Negüdel Aju Aqiu kiged Mongyol Soyul*, Kökeqota : Öbür Mongyol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a.
- 費孝通 (1989) : 中華民族的多元一体格局. 北京大学学報, 哲学社会科学版, 4, 1-19.
- 費孝通著, 塚田誠之訳 (1997) : エスニシティの探求—中国の民族に関する私の研究と見解. 国立民族学博物館研究報告, 22(2), 461-479.
- 馮大真編 (1992) : 《维吾尔人》等三本书問題討論會論文集, 烏魯木齊: 新疆人民出版社.
- 蓋山林・蓋志毅 (2002) : 文明消失的现代启悟, 呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- 侯広峰 (2001) : 昭君文化, 呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- 濱田耕作・水野清一 (1938) : 赤峰紅山後, 東方考古学叢刊.
- Humphrey, C. and Sneath, D. (1996) : *Culture and Environment in Inner Asia* (Vol.1, 2), Cambridge : The White

- Horse Press. (Urančimegほか(モンゴル語訳) : *Dotuyadu Aziy-a-yin Soyul kiged Orčin Aqai*, 2001)
- Jayar, Bayar and Bayatur (2001) : *Mongγol-un Negüdel Soyul-un Teüken Mördel*. Kökeqota : Öbür Mongγol-un Surγan Kümüjil-ün Keblel-ün Qoriy-a.
- 姜戎 (2004) : 狼図騰, 長江文芸出版社, 武漢.
- 吉尔格勒·李尔只斤 (2002) : 游牧文明史论, 呼和浩特 : 内蒙古人民出版社.
- 小長谷有紀 (1991) : モンゴルにおけるウマ, ウシ, ヒツジの搾乳儀礼——祝詞にもとづく再構成の試み. 国立民族学博物館研究報告, 16(3) : 589-632.
- 小長谷有紀 (1992) : モンゴルにおける家畜の去勢とその儀礼. 北方文化研究, 21, 121-161.
- 林幹 (1992) : 應該正確闡明匈奴的历史面貌和历史作用. 《维吾尔人》等三本书問題討論會論文集, 新疆人民出版社, 烏魯木齊, pp.108-122.
- 刘钟龄·额尔敦布和 (2001) : 游牧文明与生态文明, 内蒙古大学出版社, 呼和浩特.
- 松原正毅 (1998) : 遊牧からのメッセージ. 小長谷有紀・楊海英編 : 草原の遊牧文明——大モンゴル展に寄せて, 財団法人千里文化財団, pp.15-17.
- 孟広耀 (2002) : 北部边疆民族史研究. (上下) 哈尔滨 : 黑龙江教育出版社.
- 孟馳北 (1999) : 草原文化与人類歴史 (上下), 北京 : 國際文化出版公司.
- 敖仁其主编 (2004) : 制度变迁与游牧文明, 呼和浩特 : 内蒙古人民出版社.
- 任愛君 (2001) : 契丹史実掲要, 哈尔滨 : 哈尔滨出版社.
- Sayinčoytu (2004) : *El Bayiča-du Saγuqu-yin Yosun. Kökeqota : Öbür Mongγol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a.*
- 白石典之 (2002) : モンゴル帝国史の考古学的研究, 東京 : 同成社.
- 蘇秉琦 (2005 (1988)) : 中华文明的新曙光. : 草原文化研究資料選編, 第一輯, 呼和浩特 : 内蒙古教育出版社, p.1-6.
- 孫敬明 (2005 (1990)) : 中华文明多元一体构成的格局. 草原文化研究資料選編, 第一輯, 呼和浩特 : 内蒙古教育出版社, p.15-23.
- 田広林 (2004) : 中国东北西辽河地区的文明起源, 北京 : 中华书局.
- 田雨葛眼飘 (2005) : 元朝——铁骑踏出的帝国, 郑州 : 大象出版社.
- 梅棹忠夫 (1990) : モンゴル研究, 梅棹忠夫著作集・第二卷, 東京 : 中央公論社.
- Wittfogel, K. and Chia-Shêng Fêng (1949) : *History of China, Liao (907-1125)*, New York : The Macmillan Company.
- 吳団英 (2004) : 序. 草原文化研究資料選編, 第一輯, 呼和浩特 : 内蒙古教育出版社.
- 嚴文明 (2005 (1996)) : 中国文明起源的探索. 草原文化研究資料選編, 第一輯, 呼和浩特 : 内蒙古教育出版社, p.7-14.
- 内蒙古首届察哈尔文化研讨会在乌兰察布市举行 <http://news.nmgnews.com.cn/information/article/20050730/12045-1.html>

朝倉世界地理講座

—大地と人間の物語—

立川武蔵 安田喜憲 (監修)

2

東北アジア

岡 洋樹 境田清隆 佐々木史郎 [編]



朝倉書店